

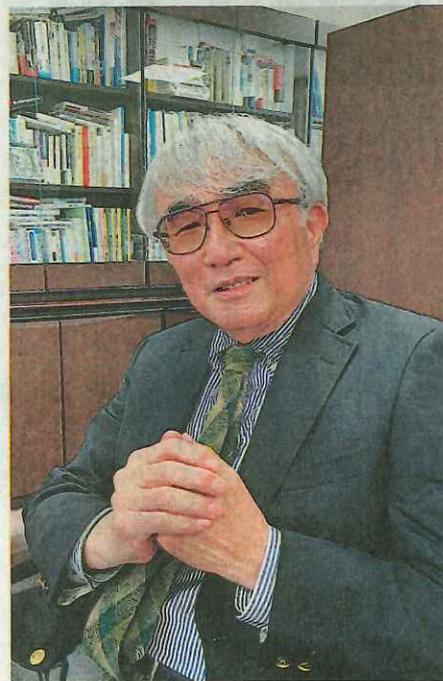
本紙連載エッセー『昭和遠近』一冊に



歌人で愛知淑徳大学長の島田修三さん(左)『名古屋』がエッセー集『昭和遠近』短歌でたどる戦後の昭和(風媒社)写真集を出した。十五年戦争や、昭和の著名人・社会現象などを詠んだ短歌を紹介することにも、戦前生まれの親を持つ戦後世代の実感をつづった。「今という時代を考える資料にしてほしい」と話す。

二〇二〇年一月から二年にわたって本紙朝刊で連載した企画の書籍化。「美空ひばり」「力道山」「安保闘争」「ベトナム戦争」「紙芝居」など約百項目を取り上げ、時代背景や思い出を記した。

「力道山」「安保」…戦後を見つめる



『昭和遠近』について語る島田修三さん＝愛知県長久手市の愛知淑徳大で

歌人、愛知淑徳大学長の島田修三さん

ても、自身の三十年代後半までと重なる印象深い時代だ。「経験しなかった遠い昭和と、記憶に強く残る近い昭和。時代や歴史を負う言葉を『歌枕』とした歌に触発されながら書いていった」と執筆を振り返る。

「ジャズのリズム」と題した回では、二〇(大正九)年生まれ、父の従軍経験から着想した自作「スウィングする心に脅え 俘虜父のIn the Moodを聴きしやかの夏」を引き、父を考へることは自分や昭和を問い直す

ことだと明かした。「父たちは敗戦で従来の価値観を否定され、私たちは戦後に生まれて復興と経済成長を生きた」。戦争を挟んだ世代間のねじれに思いをはせた。

「昭和の子」の回では、昭和が始まる二六年に生まれた歌人が山本かね子の「少女吾が戦火に死ぬと覚悟せし年月暗き昭和を悼む」(十五歳の弟を航空兵に捧げんとまことに思ひき昭和恐ろし)など五首を引いた。昭和の終わりに詠まれたこれらの歌

は「昭和という時代を生きた人間としての哀悼」と語る。戦争の時代を生き、敗戦と復興を経験しながら元号の終わりに立ち会った「昭和の子」の思いに胸を打たれたという。

項目は、バブル経済を象徴する「企業戦士」、通信手段として重宝された「伝書鳩」など、今ではなじみが薄くなった言葉も多い。電灯や街灯によって減った「暗がり」、地域の社交の場だった「縁側」などは、自身の体験をひもときながら懐かしんだ。

「現代は昭和に比べると便利で豊かになったのに、人間的な時間は不足している」と島田さん。「人間は欲望を追求してきたが、完全に充足することはない。欲望に踊らされると、人間は人間でなくなってしまう」。昭和から平成、そして令和の今へ。時代の移ろいや暮らしの変化によって、私たちは何を失って、失い、そして忘れていくか。しみじみとした筆致の中から、問いが浮かぶ。(谷口大河)

2022年11月11日(金) 中日新聞 朝刊13面より
この記事は中日新聞社の承諾を得て転載しています。